

日本の墮落を許さず、 誇りある日常を手に

日退教会長 西澤 清



日本はついに、「カジノと戦争」の国になろうとしています。「カジノと戦争」とは「博打と破壊・殺戮」のことで、今日では「私営博打・破壊・殺戮」は犯罪です。日本は、憲法前文に書かれている「平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しよう」と努めてある「国際社会」のメンバーから外れ、「名誉ある地位を占めたいと思ふ。」こともしなくなつたと言えます。国家と政治の墮落です。

世界は激動が続いています。トランプ大統領誕生、朴槿恵大統領弾劾、「同盟」国で首長を巡って大きな変動がありました。また、北アフリカの「戦争」はますます拡大し、大勢の難民が溢れ出し、EUでは民族問題などの社会の矛盾が顕在化し、排外的な意識をむき出しにした「右翼」が台頭しています。しかし一方で、トランプに危機感を感じたりベラル派が歯止めを動き出しています。

右翼の台頭は、1970年代から続く新自由主義（グローバリズム）と一体で、その帰着するところと言えます。日本の動きは、こうした流れの中に位置付けられ、安倍政権になってから海外派兵などと共に一層加速されています。新自由主義はまた、中間層の破壊、貧困層の増加、格差の拡大を生み出し、国民は耐え難いところまで追い込まれています。昨年10月、黒田日銀総裁が敗北宣

言をしたアベノミクスは、出口のないまま大きな火車となって坂道を転げ落ちるでしょう。しかし、失策を認めず反省もない安倍政権は、大惨事を引き起こし、いじめ・差別など社会の構造を歪めた福島原発事故の後処理もしていません。その上、企業育成のためインドなどに原発輸出を続け、「もんじゅ」の反省もなく、核武装必要燃料のプルトニウムを生み出す高速増殖炉の検討が続いています。さらに、地方自治を圧殺し沖縄の米軍基地建設を強行し続け、日本の抱える矛盾の傷口を広げるでしょう。企業優遇・軍事拡大は社会保障・教育の切り下げにつながりま

す。その結果、高齢者・労働者の生活はますます苦しくなります。今年はそのような傷口の拡大を許すのか、押しとどめるのかという重大な年となります。特に、「教育」に対して新自由主義（民営化）の動きが加速しています。教育に関わった者として発言を強めていきましょう。「安心して暮らせる豊かな生活」実現と、憲法を生かした「誇りある国」にするため、私たちは、仲間を増やし現職と共に、従来にも増して「平和と生活」「自由と民主主義」「社会保障と教育」を守る運動にとりくんでいこうではありませんか。以上

「年金改革法案(年金額の支給抑制)」成立 支給減 賃金下落にも連動 「マクロ経済スライド」も強化

さる12月15日に終わった臨時国会で政府・自民党は十分な議論で国民の疑問に答えることなく、不安を残したままで、TPP法案、IR法案（カジノ法案）、そして前国会から継続になっていた年金改革法案を成立させました。

今回の年金改革法案は、「将来にわたって持続可能な年金制度を保つために」、①現役世代の平均賃金が下がった場合の支給額は、これまで物価が上がれば据え置かれていたが、新ルールでは賃金の下げ幅に連動して減る。物価も賃金も下がった場合には、下落幅が大きいほうに合わせて減る、②支給額が増える局面では「マクロ経済スライド」を強化する。名目支給額を低下させないのは同じだが、目減りさせなかった分は、まとめて物価が大幅に上がる景気回復期に増加幅の抑制に反映させる、というものです。安倍政権は、2017年への持越しを嫌い、「将来の年金がきちんと確保されるのか」という肝心の議論をかみ合わせることなく成立させました。

（具体的内容は次号、および次回事務局だよりで）

日退教福島スタディーツアー

「福島原発事故から5年半…福島を…」

東京退教 藤崎喜仁



山にフレコンバックの畑や田

2011年3月11日の東日本大震災、翌日の福島第一原発事故から5年半が経った。政府や東電は原発事故を過去のものとして早期解決を議論し、帰還政策を進める中で、今、福島の現状はどうなっているのか、日退教は2016

年11月13日(日)～14日(月)に北海道から沖縄まで全国から39名の参加者で「福島スタディーツアー」『福島原発事故から5年半…福島を…』を実施した。一日目は公立学校飯坂温泉保養所あづま荘を会場に、学習会と交流会。講演は柴口正武さん(浪江東中学校・前福島県教組副委員長)の学校現場からの報告だった。柴口さんは震災時浪江中学校に勤務していた。さる8月1日、柴口さんが同僚の教職員と、校舎清掃の為に5年半ぶりに学校に入った時の映像は衝撃的だった。あの日3・11がそのまま残されていた。書棚が倒れかけ、本が散乱している図書室、机上や床に物が散らばり、人が居ないだけの職員室。卒業式当日の三年生の教室の黒板は、巣立つ生徒たちの言葉で埋められていた。一年生の掲示板には「原子力の利用」の習字



浪江駅、参加者全員で

と「いじめを許さない」掲示物が…。さらに8月21日には浪江東中学校に入る。卒業証書授与式の立て看板の脇に20数足のきちんと揃えられた上履き。生い茂った雑草と雑木で荒れ果てた校庭。机椅子文書ファイルが散らばった生徒会室。卒業する三年生の教室は、巣立っていく希望に満ちた言葉の数々…。あの日から時間が止まったままの学校の風景は、ただ悲しく虚しく、そして悔しさと怒りが込み上げてきた。その瞬間までそこに居た多くの人の生活と、生徒たちの夢と希望も一瞬のうちに奪い去った。二度と戻ることの出来ない過去だが、3・11の当日が現存している校舎は私の胸を締め付ける。

再開された浪江町の学校は、浪江小(9人)と津島小(2人)浪江中(17人)の3校が同じ仮校舎(二本松市)で学んでいる。震災前は1156人いた小学生が今は11人。398人いた中学生は17人。避難所の移動で転校を4～5回繰り返した子もいる。元気が無く精神的にも病んでいる。病院も近くに無く、買い物に直ぐに行けない距離で生活している。転校先でいじめや不登校(7割)になり、だから戻ってきた子もいる。やるせない気持ちになる。17人しか居なくても浪江中の教職員と生徒達は、少人数でも創意工夫した文化祭に取り組んだ。ふるさとを知りふるさとを学び「ふるさとを創造」する総合学習の発表。全校合唱や自主映画製作や地域ボランティア活動など、地域や生徒達の心情に寄り添った取り組みは教職員のためにも努力なしにはできない。

二日目は福島県教育会館で線量計を借用し、「避難指示区域」(避難指示解除準備区域・居住制限区域)の村や町をバスで巡った。

竹中柳一さん(福島退教・元福島県教組委員長)の案内でバスは進む。川俣町に向かう。この空間線量は0.18μsvくらい。県道脇では除染中の作業員や車両が連ねており、田や畑にフレコンバックが積み上げられている。除染をしても空間線量は低くならないのは、落ち葉のセシウムが土中に入り込むから。阿武隈山系は線量がとても高いという。

飯館村に入る。道路脇に太陽光パネルとフレコンバックの山々が目に付き、道沿いに民家が続きが人は誰も住んでいない。車中の線量は0.81μsvで高すぎる。政府は2017年3月31日で飯館村に全村避難解除の方針を出した。飯館村だけで170万個のフレコンバックが山積みされておりインフラ整備も出来ない。線量の高い地域に人々を住まわせるのは犯罪行為ではないのかと怒りが込み上げる。(環境省によると、



講座「避難校からみた原発震災」

避難指示区域には約280カ所の仮置き場があり、敷地は同省が農家などから有償で借りている。汚染された土や草木などを入れた「フレコンバッグ」と呼ばれる黒い袋(1立方メートル)が700万袋以上山積みされている。2016・11・15毎日新聞)

「高江オスプレイ・パッド、辺野古新基地の建設を許さない！東京集会」

～最高裁は沖縄の民意に応える判決を～



銀座デモに出発

市民を排除するため、全国から機動隊員を投入しています。

東京集会では佐高信さんの連帯アピールがあり、武田真一郎さん(成蹊大教授)から辺野古新基地建設裁判の問題点の指摘がなされました。和解条項にあった「協議」を尽くすことなく、裁判となり、さる9月16日、福岡高裁那覇支部は政府の主張どおりの判決を下しました。本来の争点である「翁長沖縄県知事が行った埋め立て承認取り消し」が違法かどうかを審査するのではなく、「仲井眞前知事が行った埋め立て承認」が違法かどうかを審査し、そして「反対する民意に沿わないとしても、基地負担軽減を求める民意に反するとは言えない」「辺野古が唯一であり、移設がなければ普天間基地が固定される」と裁判官自らが政府の主張を代弁しました。

高江と辺野古の新基地建設に反対する沖縄県民と「本土」の市民は、固く手を結び合うことを確認し、厳しい寒さの師走の午後の銀座をデモ行進しました。(最高裁は12/20にも棄却判決かと言われている)



日比谷野音を埋め尽くして

日退教第7次沖縄交流(その2、10月2日～3日) 台風18号の直撃受ける

日退教第7次沖縄交流は、4月のその1(辺野古座り込み)に続き、その2として企画されました。しかし、「合同学習会・交流懇親会・高江抗議行動への参加」は、台風18号の影響で、残念ながら合同学習会だけの実施となりました。学習会は「高江・辺野古の勝利に向けて」と題し 真喜志好一さんの講演をうけ、高江オスプレイパッド建設反対闘争の現状を学びました。高江の現地のたたかいは参加できませんでしたが、貴重な学習の場となりました。(参加者26名)

達の楽しい日常を容赦なく奪い去った痕跡がここにある。次に飯館中学校に行った。線量は比較的低い。校庭は除染され0・18～0・22μsvだ。この場所に50億円をかけて飯館小学校と中学校を建設すると云う。

ここから南相馬市に向かう。7万人の人口が1万人になったが人々は住んでいる。線量は0・12μsv。危険地域だ。しかし、人の動きはある。

昼食休憩し浪江町に向かう。浪江駅前降りて商店街を歩く。窓越しに中が見える店やシャッターの下りた店舗、傾き壊れかかった民家。今は誰一人いない。魂が抜け落ちた人々の営みの消えた脱け殻の街。静けさの中に沈黙の怒りが聞こえてくる。駅前の線量は1・21μsvで極めて高く

除染作業に従事する人達だ。絶えまなく車と信号だけが動き廃墟の街に違和感を与える。福島駅に戻る県道の両脇は荒れた田畑にススキとセイダカアワダチソウが生い茂り、その途中にはフレコンバッグの山が延々と続く。ずーっと見ていると原発事故で全ての生活を奪われた人々の無念さと怒りとやるせない気持ちを感じた。福島を訪ねて自分の目で見て感じたことを伝え語ることが本当に大切と感じた。福島を決して忘れてはいけないと。二日間の行動の受け入れ、その準備にお世話いただき、また、折々に貴重な話をしていたいただいた福島県退教住谷会長、浦井事務局長、バスでの視察にあたり被災地の現況・課題を細かくお話しいただいた竹中さんに感謝いたします。

第3回東アジア海外研修旅行に参加をして

神奈川 藤沢市 山崎 公江



侵華日軍七三一部隊遺址

の教科書が使われており、現在は「藤沢の教科書・採択問題にとりくむ会」に入り、ホームページの作成などを担当している。

育鵬社の教科書には「満州国の発展」という項が設けられ、「実質的に日本の支配下に置かれた満州国では、政治や経済の整備が進められ、日本企業が進出して重工業が発展し、日本の

多くの農民も開拓民として入植しました。…人口も増加し続けました。」とあり、奪い取った土地で現地の人たちを虐殺したこと、満蒙開拓団の人たちが敗戦直後に逃げ惑ったこと、中国の人たちが満州に遺棄された子どもたちを育ててくれたことなど何も書かれていない。

21世紀に入り、日本社会の右傾化は止まらない。1997年1月に「新しい歴史教科書をつくる会」が誕生したとき、これは相当まずい事態と思いい、このような動きに反対する女たちの緊急アピール運動に参加したが、あの侵略戦争さえもアジアの解放に役立ったと書きたてて、日本は正しかったと主張する教科書が実際に使われる事態となっている。歴史を直視しないで諸外国との友好は図れるのだろうか？南京事件も知らない、731部隊の細菌戦も知らない日本人が中国人と付き合えるのだろうか？

今回の旅行に参加して、私の退職後活動として始めた「藤沢の教科書・採択問題にとりくむ会」の活動に真剣に取り組み、地域の若者たちに本当のことを語る活動を始めなくてはならないと強く感じている。

「中国に対する日本の侵略を学ぶ」をテーマにした四泊五日の旅行に参加し、侵略の事実が自分あまりに無知であったことに気付き、愕然とした。とくに、1932年9月16日の平頂山虐殺事件については事件のアウトラインさえも承知しておらず、800体の遺骨を目にしたときは、涙が止まらなかった。赤ん坊や子どもを抱きしめたまま遺骨になった人たちを、侵略者の子孫である日本人は見なければ中国の人と交流できないと思った。



黒龍江省社会科学院の皆さんと参加者

◆編集後記◆

2016年8月、私が参加した現職組合東部地域教研の講師である福島県教組郡山支部元書記長が持参された資料の中に、「3・11」で発生した福島第一原発事故の「時系列表」がありました。それによると、大地震発生の14時46分から1分後、稼働中の全原子炉が「自動停止」、15時37分、原発全体が「電源喪失」となっています。これは、「想定外の大津波」で「自家発電器」が停止し「原子炉冷却装置」が「稼働不能」という事故直後の「公表」は「虚偽」ではなかったのか、ということになります。実際は、津波以前に「原発稼働用電源」である変電所が地震によって破壊されたしまったのです。

もともと、原子炉設置場所は「冷却用海水汲み上げの必要」から高さを海面に近づけるため、30メートルほど掘り下げられています。これが「地下水問題」の一要因にもなっています。そして、谷状の低地を埋め立てた軟弱な地盤の上に「変電所」を設置したため、地震の振動で機能停止になったと考えられます。この「危険性」を指摘した学者もいたと聞いています。結局、「安全性無視の原発立地」自体が重大事故を生み、「安全神話」により事故発生を想定した対応策が皆無であったことが、事故の収拾を一層困難にする事態を生むことになったと言えます。